

COG2025 応募内容確認書

ID	39-22-1
自治体名	兵庫県神戸市須磨区
自治体提示地域課題	神戸市須磨区名谷エリアにおける若者や子育て世帯の人口増加戦略
チーム名	吉川ゼミ
アイデア名	名谷7の支援があなたを"支"える"縁"に「名谷支縁7カ条」
チーム属性	学生：学生（ ）だけで構成されたチーム
チームメンバー数	2
代表者	須山 華音
メンバー（公開）	須山 華音, 宮崎 舞優

【確認事項】

- < 応募のPDFファイル名と送付先 > 確認しました。
- < 応募内容の公開 > 確認しました。
- < 知的所有権・肖像権 > 確認しました。問題ありません。

アイデア提案書

冒頭ページ

チーム名：吉川ゼミ

アイデア名：名谷7の支援があなたを"支"える"縁"に「名谷支縁7カ条」

該当する自治体名：兵庫県神戸市須磨区

自治体提示の地域課題：神戸市須磨区名谷エリアにおける若者や子育て世帯の人口増加戦略

1. アイデアの全体像

1-1 提案するアイデアのあらまし

【アイデアの概要】

本提案は、子育て世代を中心とした新規の名谷への移住者を増やすことを目的とし、地域の「リアルな声」を可視化することで、名谷を「子育てしやすいまち」として内外に発信する参加型まちづくりプロジェクトである。

子育て中の親が感じやすい不安や孤立感に対し、地域住民自身の言葉による手紙、食を通じた交流、世代を超えた関わり、夜道を照らす光といった日常的な体験を重ねることで、「ここなら安心して子育てできる」という実感を生み出す。

支援を受ける側・行う側を分けず、子ども・親・高齢者・学生が主体的に関わる仕組みとすることで、名谷での暮らしの魅力を「制度」ではなく「体験」として伝え、結果として名谷への移住を後押しすることを目指す。

1-2 提案するアイデアの内容（5W1H）

What（なにを）

子育て世帯の新規呼び込みを目的とした7つの支援を提案。

- ① リアルな声を届けよう「名谷お繋ぎレター」
- ② あなたの声が「幸」せの交「換」に「幸換ポスト」
- ③ 手紙が繋ぐ優しさに「おむつ還元制度」
- ④ 「こそ」だての「こそ」っとご褒美「こそっとパス」
- ⑤ 名谷で食べる、繋がるレストラン「ふぁみれす」
- ⑥ みんなで育てる「地域食育畑」
- ⑦ 希望の光を照らそう「名谷ライトアップ作戦」

循環型の子育て支援・地域交流サービスを実施し、名谷について知ってもらうきっかけに。また、支援を1つずつ捉えるのではなく、7つをまとめて1つの大きな支援にすることで、行動の中で支援を受けることが出来る仕組み。

Who（誰が）

- 大学生チーム（企画立案・運営・回収・制作）
- 地域ボランティア（子育てを終えた世代）
- 名谷地域の飲食店・パン屋・コープ等の協力店舗
- 須磨区地域協働課
- 兵庫県内の産婦人科（手紙の掲載協力）
- 市役所（掲示・物資管理・制度連携）
- 子ども食堂「あおぞら」との連携

Who (誰に)

主な対象者

- 子育て中の親（特に未就学児の保護者）
- これから子育てを始める妊産婦・家族
- 子育てしやすい町を探している人

主体的関与者

- 名谷に住む地域住民（手紙・声の投稿）
- 子どもたち（灯籠制作・食堂参加）
- 高齢世代（食堂ボランティア・見守り）

When (いつ)

- 通年実施（継続型プロジェクト）
- 名谷お繋ぎレター：常設
- 幸換ポスト：月1回回収
- おむつ還元：月単位で実施
- こそっとパス：提携店舗にて月1配布
- ふぁみれす：週1回～数回
- 食育畑：通年実施（季節ごとに作物を変更）
- ライトアップ：イベント日・一定期間設置

Where (どこで)

- 名谷駅周辺
- 名谷駅レストラン
- 市役所
- 地域掲示板
- ふぁみれす（地域食堂）
- ふぁみれす横の空きスペース（食育畑）
- ふぁみれす周辺の森林・歩道
- 兵庫県内の産婦人科（手紙掲示）

How (どのように)

- 画用紙・手作りポスト・灯籠など低コストで大学生が実施可能
- 行政・店舗・地域団体と連携し実装
- 「書く → 入れる → 交換される → 共有される」循環設計
- 食育畑で「育てる → 食べる」体験を日常化
- 光・食・手紙を通して自然な世代間交流を促進

2. アイデアの理由

2-1 理由のポイント

本アイデアは、子育て世代が移住先を選ぶ際に重視する「安心感」「人とのつながり」「日常の暮らしやすさ」を、制度ではなく体験として可視化できる点に価値がある。

7つの政策を生活動線上で連動させ、1つのブランドとして展開することで、支援が点在せず「暮らしの中に自然に存在する」状態をつくり出し、名谷での子育て生活を具体的に想像できるようにする。

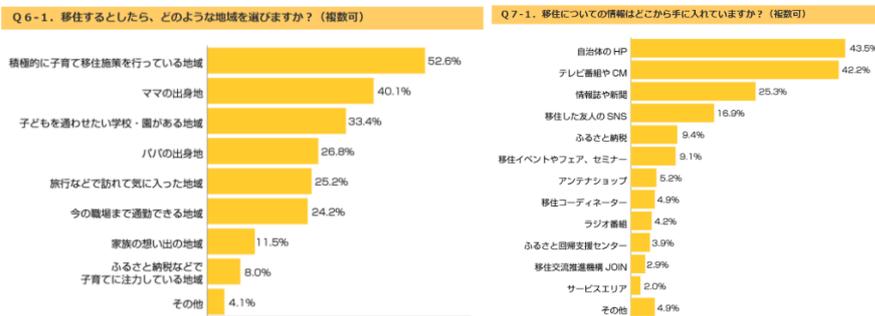
その結果、名谷に住む魅力が外部にも伝わり、新規移住者の増加につながると思う。

2-2 根拠と裏付け

下記表は、移住相談件数の増加から見える関心の高まり（総務省より）を表したものである。



総務省の「移住相談に関する調査結果」[000978319.pdf](#)によると、全国の自治体が令和5年度に受け付けた移住相談件数は約40万件を超え、調査開始以降で過去最多となった。これは、相談窓口・イベント両方の相談件数が前年より増加していることにより示され、全国的に地方移住への関心の高まりが裏付けられている。このデータは、「移住したい」という希望が単なる関心ではなく、実際に相談行動として表れていることを示す客観的な指標であり、移住促進施策に対するニーズが高まっていることの根拠として有効である。



また、移住希望者が地域を選ぶ際には、制度の有無だけでなく「その地域で実際に暮らすイメージが持てるか」が重要である。

Happy-Note.com(子育て応援サイト | [ハッピー・ノート.com](#) | [ミキハウス子育て総研](#))による2023年に実施された子育てファミリーの移住意向調査によると、移住情報の入手先として

「自治体のホームページ (43.5%)」や「テレビ番組・CM (42.2%)」が多い一方で、「移住した友人の SNS (16.9%)」も一定数存在しており、実際に住んでいる人のリアルな声が意思決定に影響していることが分かる。

また、「移住するとしたらどのような地域を選ぶか」という問いに対しては、「積極的に子育て移住施策を行っている地域」が 52.6%と最も高く、次いで「子どもを通わせたい学校・園がある地域 (33.4%)」「旅行などで訪れて気に入った地域 (25.2%)」が続いている。

この結果から、子育て支援の“内容”だけでなく、地域の雰囲気や人との関わりを含めた体験価値が、移住先選択の大きな判断材料になっていることが読み取れる。

本提案の「名谷お繋ぎレター」「幸換ポスト」「ふぁみれす」「食育畑」など 7 つの施策は、こうしたニーズに対し、制度説明では伝わりにくい生活者の声・日常の安心感・地域との距離の近さを、移住検討者に具体的に届ける仕組みである。

特に、駅・レストラン・市役所といった生活動線上で支援を受けられる設計と、7 つの施策を一体的なブランドとして展開する点は、「子育てしやすい地域を探しているが、決め手が分からない」層に対して、名谷での暮らしを明確に想像させる効果が期待できる。

これらの取り組みにより、名谷を「支援が点在するまち」ではなく、暮らしの中で自然に支援とつながれる子育てのまちとして発信することが可能となり、新規移住者の増加に寄与すると考えられる。

神戸市として見ると、神戸の中央区や灘区、兵庫区などでは人口が増え続けているため、移住を考える人も多いが、須磨区のように人口の減少が続いている区も存在している。

実際に須磨区地域協働課の方々と共に、名谷に足を運んでみたが、高齢者の徘徊の多さや新施設のみが賑わっている現状が広がっていた。しかし、子ども食堂「あおぞら」では、名谷に住むおばあさんがボランティアとしておいしいご飯を提供している温かい場所や、モノ作りが得意なおじいさんが木材で作製した野菜ボックス、小さな畑を分け合いながら地域の方々と野菜を作り、交換ノートで記録をしているものなど、地域の温かさを実感した。この地域コミュニティを知ってもらい、住みやすい町であることを広めるためにこの「名谷支縁 7 カ条」が有効であると強く感じている。

神戸市は、「共働き子育てしやすい街ランキング 2024」で全国 1 位を獲得したにも関わらず、どのような政策があるかを知っている神戸市民は数少ない。「名谷支縁 7 カ条」は、生活動線の中で受けることのできる支援であり、“出会える支援”であることで、名谷の良さリアルな声で発信すると共に、より認知度向上にも繋がると考えた。

3. 実現までの流れ

3-1 実現する主体

本事業は、大学生チームを中心とした地域連携型の実施体制により運営する。

- 中心主体
 - 大学生チーム
 - 全体企画・運営
 - 各施策（①～⑦）の管理
 - 広報・記録・効果測定
- 協力主体
 - 名谷地域住民（子育て世代・高齢世代）
 - 手紙投稿、畑・食堂への参加、ボランティア
 - 地域店舗・事業者
 - こそっとパスの提供
 - 市役所
 - ポスト設置協力、掲示板掲載
 - おむつ還元制度の物資管理
 - 既存子ども食堂・地域団体
 - 運営ノウハウ提供、連携

学生が主体となりつつ、既存の地域資源と連携することで、過度な新規負担を生まない体制とする。

3-2 必要な資源と調達方法

ヒト（人材・スキル）

- 必要人材
 - 学生運営メンバー（企画・運営・広報）
 - 地域ボランティア（見守り・畑指導・調理補助）
- 確保方法
 - 大学内での募集
 - 地域掲示板・食堂を通じた協力呼びかけ
 - 子育てを終えた世代への参加依頼

モノ（機材・設備・場所）

- 画用紙・ペン・ラミネート用品
- 手作りポスト
- ろうそく型ライト
- 畑用資材（種・道具）
- 食堂設備（既存施設を活用）

調達方法

- 自作・既存設備の活用
- 地域店舗・住民からの寄付
- 低コスト資材の購入

カネ（資金）

本事業は少額予算での実施を前提とし、初期費用約 5 万円を想定する。

資金は以下のように必要最低限の項目へ配分する。

- 消耗品費（画用紙・ペン・ラミネート等）：1.5 万円
- ポスト制作費（木材・塗料など）：1 万円
- ライトアップ資材（ろうそく型ライト）：1.5 万円
- 食育畑関連（種・苗・簡易農具）：1 万円

資金は大学・自治体の地域連携補助金、地域事業者からの協賛、住民からの寄付や物品提供により調達する。既存施設の活用と手作りを基本とすることで、限られた予算でも実行可能な資金計画としている。

3-3 実現までのプロセスと時間軸

ステップ 1：準備期（1～2 か月）

- 学生チーム結成
- 市役所・地域団体との調整
- 各施策の具体設計

ステップ 2：試行期（3～6 か月）

- 名谷お繋ぎレター・幸換ポスト設置
- ふあみれす・食育畑の試験運用
- 小規模ライトアップ実施

ステップ 3：本格実施期（7 か月目以降）

- 7 施策を連動させた本格運用
- 効果測定・改善
- 移住促進施策との連携検討

3-4 想定リスクとその対応策

想定リスク	対応策
学生メンバーの入れ替わり	マニュアル化・引き継ぎ資料作成
参加者が集まらない	食堂・畑など参加しやすい場を起点に拡大
物資の偏り・不正利用	記名制・回数制限を設ける
行政手続きの制約	市役所と事前協議し試行的運用
継続性の低下	地域主体への段階的移行